

# 学習院大学史料館 ミュージアム・レター

## Gakushuin University Museum of History Museum Letter No.21

発行日 ● 平成25年(2013)2月12日

もくじ

ごあいさつ.....	1
次回展覧会と史料閲覧についてのお知らせ.....	1
第69回 学習院大学史料館講座 「教育の力 時代を超えて今に生きるもの —戦前・戦中・戦後 女子学習院から学習院女子部へ—」 .....	2・3・4
新刊のご案内.....	4

### 次回展覧会と史料閲覧についてのお知らせ

史料館では、2012年冬から2013年夏にかけ、収蔵庫整備を実施中です。そのため、次回の展覧会「東洋文庫・永青文庫との3館連携展示「東洋学の歩いた道(仮)」は、9月下旬からの開催となります。詳細は次号でお知らせ致します。

また、史料(マイクロ史料含む)については、収蔵庫からの史料出納が不可能になるため、3月30日(土)まで閲覧を停止させていただいております。

### ごあいさつ

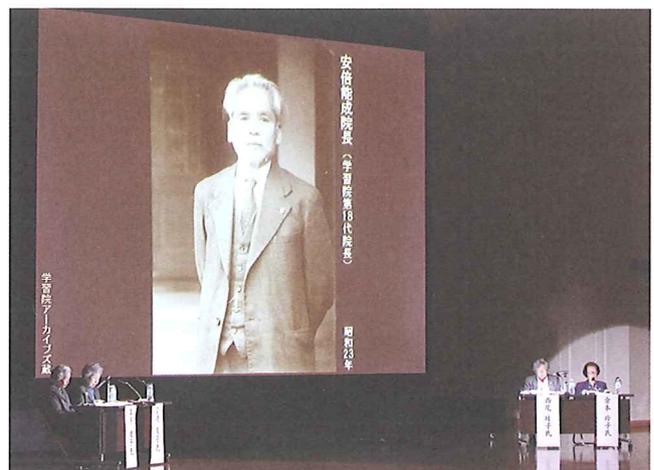
昨年11月24日、特別展「近代日本の学びの風景—学校文化の源流—」を開催中の史料館では、学習院女子高等科の昭和26年卒業生有志を講師にお迎えし、戦前・戦中・戦後の学習院の女子教育について話していただきました(第69回史料館講座)。本号はその内容をまとめたものです。

学習院、それも戦前の学習院の女子教育といえば、深窓の令嬢たちを育むものだったわけですが、意外に質実剛健であったことを知りました。それは講師の方々が入学された昭和14年(1939)の日本がすでに戦争に向かっていくことと関係するかもしれませんが、一方で、他の中学校では英語を教えなくなった戦争中も、女子学習院では従来どおり英語の授業があったというのは、時流に左右されない教育方針を感じさせます。戦争と言えば、疎開中の暮らしについてのお話も印象的でした。空腹を抱えた少女たちが食べたいものを描いたかわいらしい絵も披露され、よく保存されたと感銘を受けました。

女子学習院の教育は、生徒たちがどんな場面でもたじろがず、正面から物事に立ち向かう逞しさ、しなやかさ、そして明るさを身につけることを目指すものでした。その方針は、今でも学習院女子中等科・高等科に脈々と受け継がれているように思います。学習院大学には女子高等科から進学してくる人も少なくありません。私は哲学科の教員として十数年にわたりさまざまな学生に接して来ましたが、女子高等科出身者はたいへん元気で積極的な人達、とても頼もしい人達であるという印象を持っております。そこで、女子高等科の教育や環境に何か特別なものがあるのではないかと常々考えておりました。今回のお話で、確かにそうだったと確信した次第です。

当日の講師の皆様と、準備段階でご尽力くださった皆様  
に心から御礼申し上げます。

(館長 高橋裕子)



# 教育の力 時代を超えて今に生きるもの

## —戦前・戦中・戦後 女子学習院から学習院女子部へ—



左から、講師の西原氏・宮崎氏・西尾氏・倉本氏・武井氏・須山氏

司会◇明治10年、開校当初の学習院は、男子小学・女子小学・中学という編成で、主に男子の教育課程に重点が置かれていたため、明治17年宮内省管轄の官立学校となった際、別に華族女学校が設立されました。それが後に学習院と一体となり女子学習院へ、そして現在の学習院初等科や学習院女子中等科・女子高等科（通称女子部）へ編成されてゆきます。

今回の講座では、青山の女子学習院で現在の初等科にあたる時代を学ばれ、その後女子中等科・高等科へ進まれた方々を講師にお招きし、展示ではご紹介できなかった女子の初等教育をはじめ、激動の時代にも息づいた教育の力について、実際の御体験をもとに御講演いただきます。

西尾氏◇思苑会（昭和26年学習院女子高等科卒業生）では、5年程前に『昭和を生きて』という名の文集を作りました。その執筆と編集を通して、戦前・戦中・戦後の学習院で受けた教育が、ただ教養とか知識だけでなくもっと根本的なもの、どんな時でもどんな場面にも正面から向き合える精神の力といったものを与えていただいた事に改めて気づきました。

特に戦中、私達のクラスは、学童疎開組と、個人疎開組と、親の仕事の関係で東京にいたいわゆる残留組と、バラバラに暮らしまとまった経験をしていません。そこで、今日の講座ではそれぞれの体験者がその実態についてお話しすることに致します。

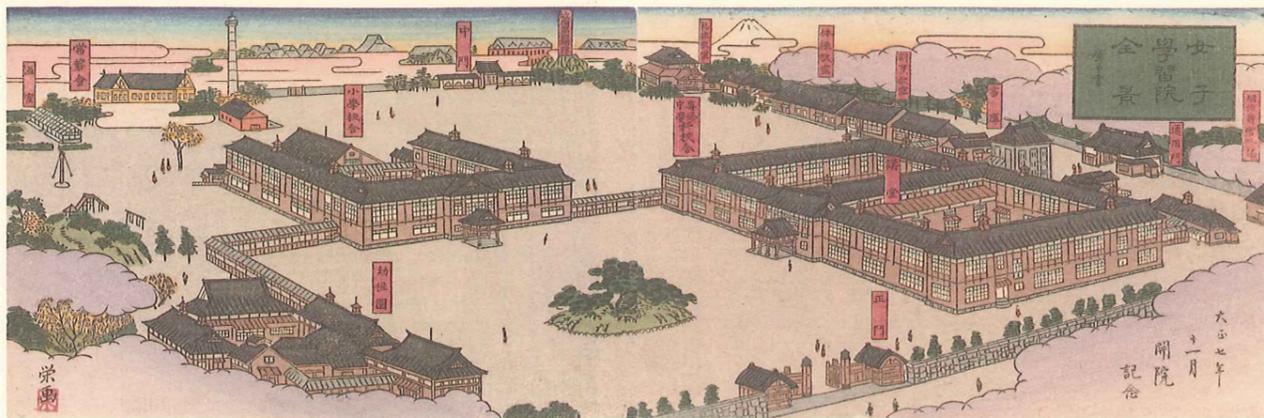
### 1. 青山校舎の頃

武井氏◇私達が6歳、一年生になった昭和14年、その頃、女子学習院は宮内省管轄で、一種のエリート養成のための学校でし

た。すなわち、皇族・華族を中心とした身分社会の、国における将来の指導者層となる人々の配偶者にふさわしい、立派な女子を教育するという使命を持っていました。青山の女子学習院は、広々とした敷地にどっしりとした木造の校舎が幾棟もありました。よく整備された校庭には様々な樹木や植物が緑豊かに植えられ、体操場、運動場が各2箇所、中等科の校舎には、ピアノの練習室がいく部屋も並んでおり、南通用門の側には弓道場もありました。

入学時1クラス24名の小人数編成、南組北組の2クラスで1学年でした。式の後、主管（担任）の先生から銘々に『教学聖訓』という立派な金糸織の畳紙に包んだ本を渡されました。これは、いわば勅語集で、皇后陛下から賜った御歌などが網羅してありました。さらに、もう一枚配られた厚手の紙には「オヤクソク」とありました。「○何事モシンノウツヨクイタシマス ○不便モ不足モガマンヲシマス ○何デモ大事ニ使ヒマス ○シツカリ勉強イタシマス ○カラダヲ丈夫ニキタヘマス ○出征シテキル方々ニカンシヤシマス ○人ノタメニ喜ンデ働キマス」この7箇条は毎日声に出して読み上げて暗唱できるようになりました。また、最敬礼のお稽古もありました。神宮競技場で行われた春の体操会には、海軍軍楽隊の生演奏が高々と響きました。授業は学科ごとに専門の先生が担当なさる仕組みで、特に国語の授業は重視されていたと思います。宮崎氏◇立派な女子を教育するという展望のもと、どのような場面でも動じないよう、学校では上級になるほどいろいろな行事がありました。大勢の前で正しい姿勢ではっきりとよい日本語で話す訓練「修辞会」や、外国の高位の人々と堂々と交わるための外国語を話す訓練「欧語会」などが度々催されました。

言葉といえば、戦前の女子学習院には今では考えられないような敬語の使い方がありました。現在の敬語では、身内のことを外に対していうとき「私の父が申しておりました」とか、社長に関しても「午後には戻っております」などと謙讓語を使いますが、先生からは「皆さんのお父様、お母様はご身分の高い方々ですから、敬語を使わなければなりません」と教わりました。つまり家庭内のメンバーでない外の相手にも「お母様が仰いました」「お父様に申し上げました」と表現しなければならぬのです。しかし、このような古風な教育は戦後になって消えていきました。



〔青山校舎の様子〕

絵葉書「女子学習院 全景」(復刻版) 大正7年11月開院記念 学習院大学史料館所蔵



1. 青山校舎航空写真 (S10年) 2. 女子学習院入学時にいただいた『教学聖訓』 (S14年) 3. 塩原疎開中、自由時間に皆で考えた食べたいおやつ 4. 明賀屋玄関での初等科卒業記念写真 (S20年) 5. 工藤祐基先生 6. 現在も女子部校舎として使用されている近衛騎兵連隊の建物

昭和16年12月、日本は戦争に突入します。しばらく学校生活は平穏に過ぎましたが、先生が出征なさるなど身近に戦争が忍びより、いよいよ戦況が厳しくなった昭和19年8月23日、私達は栃木県塩原へ集団疎開をしました。初等科4年から中等科2年までの212名と先生が、塩原の明賀屋旅館に引越しました。

### 2. 塩原 疎开学園の生活

武井氏◇明賀屋旅館は、とても美しい自然に囲まれていました。旅館を借り切り、各教科の先生方も一緒に、いわば学校そのものの移転です。本館は木造4階建てで居住部分に充てられ、上級生を室長として、下級生を組み合わせで部屋割りを決めました。渡り廊下で本館とつながっている新館の百五十畳の大広間を仕切って5つの教室が作られ、学年毎の授業は毎日朝8時半から行われます。大広間の舞台を使って合唱や劇などを取り混ぜた談話会や万葉集の和歌などを鑑賞しつつ月見の会も行われました。食糧事情は厳しく、地元の野菜などを使って工夫したものが多かったが、大抵一汁一菜でしたからとてもお腹がすきました。お手玉の中の小豆、お裁縫の鑲でバリバリにのびたみかんの皮、コップの中でソースをかけて佃煮にしたお茶殻など、自由時間にあれこれ工夫して拵えて食べました。困ったことは、ノミ・シラミに悩まされたこと。栄養状態が悪いせいか、さされたあとが化膿する生徒もいました。食事にいされる大根の葉やお芋をいれたおかゆがだんだん水っぽくなるので、食料が乏しくなるとゆくのを感じていましたが、このような中でも、授業は毎日着実に進められました。先生方の御苦労は、並大抵ではなかったと思います。

倉本氏◇昭和20年4月、塩原疎开学園の生徒となるべく、中等科新入生と初等科新4年生は上野駅に集合しました。私もその中の1人でした。空襲が激化している東京に残る親は、幼い子供を付き添いの先生の手託して、必死で無事を祈っていました。ようやく行き着いた明賀屋で、新入生18名の入学式が行われ、続いて主管の先生に案内されて中一の教室に行きました。屈託のない沢山の笑顔が緊張気味の私達を暖かく迎え入れてくれました。授業の中でも中等科で新しく加わった西洋史と英語が新鮮で魅力的でした。戦時中、多くの学校で敵国語として排斥されていた英語の授業も、学習院では通常通り行われていました。広い教室が静まるのは、食事の時間と、屋内勤務奉仕の時間です。端布から織り糸を再生する機結びの作業を、私達は黙々と続けました。自習時間と自由時間には教室が一段と活気に溢れました。

5月、東京山の手大空襲により、女子学習院の校舎全焼の報せがありました。8月、玉音放送を聞き、日本の敗戦を知りました。秋になると帰京する人、家族の疎開先へ行く人など、生徒がひっそりと去っていくようになり、11月、塩原疎开学園は閉園します。武井氏◇空襲で家が焼けて帰京できない生徒14名と数名の先生方が、西那須野の三島通陽家別邸の離れに移りました。延長疎开学園という形で、引き続き授業と生活が営まれました。翌年3月にこの学園が終了した時の生徒数は8名でした。女子学習院の先輩である三島氏とご家族には、大変にお世話になりました。

### 3. 青山校舎の焼失

西尾氏◇昭和19年夏、クラスの半分以上が学童疎開で塩原に

行ってしまった後、残留組と呼ばれる少数の生徒は、そのまま青山校舎に通って、半日勉強、半日ガーゼ畳みの勤務奉仕をしました。昭和20年4月に中等科に進学した頃には、夜も昼もしばしば空襲がありました。3月10日の下町大空襲に次いで、5月23日・25日にも東京大空襲があり、青山・渋谷・麻布が焦土と化しました。私も母とともに煙と火を避け青山墓地に逃げました。空襲警報が解除になって自宅に帰る前に、青山校舎の様子が気がかりで見に行ったところ、すでに建物の礎石とくすぶる残骸を見るだけでした。燃え続ける町を通過して辿り着いた我が家は、瓦礫の山となっていました。箱根へ向かうため表参道を通り抜けて歩いた時、焼けた死体や防火用水の中に浮いている死体を見ました。南新宿で小田急線の車内に座った時の記憶はほとんどなく、ただ火傷を負っていないことを確かめて、座らせてもらっていました。背中リュックには、『教学聖訓』と焼おにぎりをに入れてもらっていました。東京に残った友人達は、多かれ少なかれこのような惨状を見、口は閉じていても生忘れぬこととして頭に残しているはずでした。

### 4. 東京 仮校舎での授業

西尾氏◇青山の校舎を失ってから、目白の徳川義親邸の一部をお借りした授業と勤務奉仕が始まりましたが、しばしばB29の爆撃を受けました。通学途上で機銃掃射を受けることも珍しくありませんでした。遠路、徳川邸に着くと、先生と、ああ無事でよかった！と手を取り合うのが挨拶でした。

やがて終戦を迎え長期休暇に入った学校は、文京区音羽の護国寺境内の幼稚園を仮の校舎として10月10日再開します。塩原から、あるいは個人疎開先から復学して来る旧友との再会で毎日が感動でした。この教室で、初めて私達のクラスは中等科一年として揃ったのです。

### 5. 戸山ヶ原に新校舎の地を求めて

西尾氏◇昭和21年3月のある日、先生から荷物と椅子をもって外に並ぶよう突然いわれました。2列になって行進です。着いた先が、今の女子部、当時の近衛騎兵連隊兵舎でした。このときのことを、私達を高等科の3年間主管として導かれた工藤祐基先生が書かれた記録が、「輔仁会雑誌」第189号に載っています。

武井氏◇(注：講座当日は、工藤先生の記録を抜粋して武井氏が朗読されましたが、ここではその一部を要約してご紹介します) 工藤先生の記録によれば、新しい学習院の校舎は、青山の焼け跡に再建するのが最も望ましいことでしたが、終戦後11月に皇室全財産の凍結が発令され、短期間の再建は不可能と思われました。既存の建物を手に入れることが唯一の方法で、不用



武井 純子氏 宮崎 茂子氏

となった軍関係の建物から探そうということになりました。戸山の近衛騎兵連隊の敷地建物全部が宮内省の管理下にあるのは21年3月限りということになり、下村寿一院長らが各方面と折衝にあたり、学校内でも全職員に発表にされたのは3月10日頃でした。どこから横槍が出るか分からず、移管したということを一日も早く事実とする必要がありました。こうしたわけで、3月13日、院長以下のすばやい決断により、初等科と中等科は音羽から、高等科と研究科は目白から、降りしきる雪のなか椅子や本を手に、私たち生徒は戸山の地へ行進することとなったのです。

## 6. 戸山校舎での中・高生活

西尾氏◇明治通りから門を入ると、桜並木が続いていました。兵舎だった堅牢な建物が左側に見えてきて、その中に中等科、高等科それぞれに教室が割り当てられました。兵舎の中は長く一直線に続く廊下があり、初めのうちはガラスもまだ入らず、兵隊の銃をたてかける銃架が廊下との境目になっていました。冬はとても寒く、オーバーを着たまま授業を受けました。晴れた日は、皆で椅子を外にもって出て、日の当たる個所を探してひと固まりになり、肩を寄せ合って授業を受けたこともありました。新しい中学生生活は、こういう環境に適應する事から始まりました。セーラー服も上級生から譲っていただきました。ともかく、再会した友と本式のクラス編成になった喜びは大きく、やがて笑顔が教室に並びました。少しずつ青春らしい中学生生活が始まり、頭を学業に戻す大切な時間が来しました。茶道や華道・書道などの古典文化に関する部活動も始まりました。

昭和21年から22年にかけて、戦後の学校制度に大きな改革が行われました。学習院では、戦後初の学習院長として安倍能成氏が就任し、22年の教育基本法の改正と学校教育法の公布に伴い、6・3・3・4制が導入されました。学習院はこの年に文部省所轄の学校法人となり、私達の学んでいる女子学習院の名称が、学習院女子中等科・高等科と改められました。戸山の学校も、運動場が整備され、野菜畑だった校舎の側面の土地はテニスコートに、教室の仕切りもガラス戸やガラス窓が入り、落ち着いて勉強のできる校舎に次々と整備されていきました。倉本氏◇私達は、そのような中で高等科に進学し、激動の戦前・戦中・戦後の時代を経て変革した社会とそれに伴う生活の転換という事実を冷静に理解できるようになっていました。級友たちの多くも、不思議に明るく、ある種の達観を以てこれを取り越えようとしていました。授業は教科数が増え内容も充実し、女子学習院時代からの伝統的な行事「球技会」「欧語会」も復活しました。

私達の世代は、感受性が豊かな年頃に教育制度の大規模な改革が施行され、教育理念も教育環境も激変する中で成長しました。しかし、このような状況でも、先生方は私達に対して変わることなく、各自の個性を認めて育てて下さいました。



昭和26年3月、私達は、揃って思い出深い学び舎と桜並木にわかれを告げ、新たな道を出立したのでした。

## 7. エピローグ 時代を超えて今に生きるもの

(注：ここで西原健子氏の作文の朗読がありましたが、紙面の都合上、割愛させていただきました。作文の全文は『昭和を生きて』に掲載されております)

宮崎氏◇今日のお話しを通してお伝えしたいことは、環境の激変の中にあっても人が持ち続けるしなやかさ、遅しさ、明るさ、何事にもたじろがず、真正面を向いて歩く誇りです。私は、西原さんの作文を読んで、女子学習院入学の際の「オヤクソク」を思い出しました。紙に書いたオヤクソクの文言は、戦後目にしなくなりましたが、西原さんのように戦後入学した級友達にも、生きる指針としてこの精神の伝統は共有されています。

西尾氏◇この学校に古くから護られて来た倫理観は、知らず知らずのうちに先輩から後輩へ受け継がれ、その時代時代に生きるもの達に、常に新しい息吹を、活力の源を与えて下さいました。この「今」を生きる力こそ時代を超えていく教育の力であり、学習院に今後も伝えられていくものと思っております。

### 第69回史料館講座

日時：平成24年11月24日(土) 14時～16時

会場：学習院創立百周年記念会館 正堂

講師：代表 西尾瑛子氏(公益社団法人国際日本語普及協会会長)

倉本玲子氏、武井絢子氏、宮崎茂子氏、西原健子氏

〔構成担当〕須山名保子氏

学習院女子部卒 常磐会第63回(思苑会)「昭和を生きて」編集委員

写真協力：学習院アーカイブズ、学習院募金部

講演録編集：学習院大学史料館 学芸員 吉廣さやか

### 新刊のご案内

#### 学習院大学史料館編集

## 『絵葉書で読み解く大正時代』

「大正の記憶 絵葉書の時代」展の貴重な展示資料を基に、200点以上の美しい図版・絵葉書から大正時代の諸様相を読み解く新しい「大正時代史」の本ができあがりました。全国の書店にて好評発売中!



彩流社より2012年12月刊  
A5版フルカラー 168頁  
定価 2800円(税別)

### ミュージアム・レター第21号

2013年2月12日発行

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

電話 03(3986)0221

内線 6569

FAX 03(5992)9219

Gakushuin University Museum of History  
学習院大学史料館

● ホームページもご覧ください

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>

